

「くらい」の意味的特徴

—「ほど」との比較を中心に—

田中 聡子

キーワード くらい、ほど、程度、話し手の評価、伝達意図との関係

1. はじめに

1.1 取り上げる問題

程度に関わる非自立形式¹「くらい（ぐらい）」は、「びっくりするほど大きい・びっくりするくらい大きい」のように、言語形式「ほど」との顕著な類義性を示している。その一方で両者を入れ換えられないケースもしばしばある。その違いはどこにあるのだろうか。こうした形式に関する先行研究は、筆者の調べた範囲では、「ほど」を中心テーマとしてその視点から「くらい（ぐらい）」にも言及するものや「だけ」および「ばかり」を中心に扱う研究はあるものの、現代日本語の「くらい（ぐらい）」を中心テーマとするものは見当たらない。そこで本稿では「くらい（ぐらい）」に焦点を当て、特に類義性の高い「ほど」との比較を中心として、「くらい（ぐらい）」の意味的特徴を明らかにすることを目指す。

以下「くらい」は「ぐらい」をも含むものとする。²また本稿では「程度」という用語を、「様態副詞」と区別して「程度副詞」というときの「程度」よりも広い意味において用いる。つまりある事態が何らかの尺度上のある値または範囲と関わる場合には、それが大きさ、強さ、量、回数のいずれであっても、また数量化できるものであってもなくても、すべてその事態が何らかの「程度」を内包するという意味において用いる。そこで程度副詞か数量詞か様態副詞かという区別は本稿では取り上げない。

1.2 先行研究の検討

奥津（1980）は「ほど」を中心テーマとする論文であるが、「くらい」にも言及しており、「ほど」や「くらい」に前接する語句が単なる名詞であっても、その名詞は意味的には「主文と同じ述語を持つ補文」（160頁）に相当すると指摘している。つまり「ほど」や「くらい」が導入するのは、単なる存在物ではな

くそうした存在物を参与者とする何らかの事態であるということで、程度性を含むのは事態であるから、これは妥当な指摘であると思われる。一方、「程度のホド」（「病気ニナルホド勉強シタ」）と「比例のホド」（「争エバ争ウホド二人ノ孤独ハ深マッタ」）を同音異義語としている点は容認しがたい。国広（1982：97）にしたがって、「同一の音形に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結びついている」この場合は、一つの多義語と見る方が妥当であろう。また「程度のホド」を「非常の程度」「通常の程度」「同程度」の三種に分けているが、川端（2000：41）も指摘するように、文脈次第でいくらかでも多様な程度を示しうる「Pほど」を、程度の大きさとで分類することにはあまり意味がないと思われる。これは「くらい」についても同様である。

丹羽（1992）は、「ほど」、「くらい」、「程度」という三形式の意味に関して、「高低評価を表さない場合は三者いずれも可能で、高低評価を表す場合には、「ほど」が高程度を表し、「くらい」は高程度を表すこともあるが低程度を表すことも少なくなく、「程度」は低程度に傾くという傾向を見て取ることができる」（103頁）と記述している。しかし各形式についていくつかの例を挙げるにとどまり、この三者の意味の違いに関わる分析はしていない。

井本（1999）は、「『ほど』構文の解釈」を、主文の動詞の分類に基づいて「目的語が大量」、「主語が大量」、「事象回数が大量」などのように細かく分類している。しかし「ほど」という形式を他の類似の形式から区別する意味的特徴は何かという問題は扱っていない。

川端（2002）も同じく「ほど」を扱う論文であるが、「くらい」との違いについてはかなりの言及がある。まず「ほど」の意味については、「PほどQ」という表現は、「PはQであると認定されるに十分な基準である」（40頁）という話し手によるPの評価を含むと説明されている。言い換えれば、Qの表す事態の程度がそこを目指して近づく「完成点または到達点」（42頁）としてPが示されるということである。一方「くらい」については、「『PぐらいQ』はPとQの対一の関係を表すため、Qをはかるスケール上にPの評価に該当する範囲が示されない」（45頁）と説明されている。ここで「Pの評価に該当する範囲」とは、何かをPとして認定できる暗黙の基準値ということである。また、「Pほど」の表す程度が「非常の程度・最高程度へ偏る」傾向を持つこと、そしてその理由として、「Pほど」では「目立ち性」が「話し手の驚きや興奮と共に強調されなくてはならない」（47頁）ことを挙げた後、すぐに続けて、「Pぐらい」は「どのような程度をも指定できる」（47頁）と述べている。

程度の高さへの感情的評価を含む「ほど」と異なり、「くらい」はどのような程度であろうと問題にしないということは、この形式には程度に関する話者の

評価が含まれないということである。しかしはたして「くらい」は本当に「どのような程度をも指定できる」のか、言い換えれば「くらい」には話し手による評価が本当に含まれないのか、という点については、「くらい」を詳しく考察した上で結論を出す必要がある。

「ほど」と「くらい」のもう一つの違いとして、同論文は、「P ぐらい」が「否定の形式と必ずしも共起しない」のに対し、「P ほど」は「否定の形式と自由に共起できる」(41頁)と指摘している。もしも否定の形式との共起の制約が「ほど」にはなくて「くらい」にあるとすれば、この制約もまた「くらい」の意味記述が明らかにするべき問題である。

1. 3. 問題点の整理

「くらい」の分析に入る前に、上で見た先行研究の議論を検討し問題点を整理しておきたい。まず「ほど」を含む次の実例を考えてみよう。

- (1) いまから二〇憶年ぐらい前には、月が地球にぶつかりそうなほど接近してることになるんです。(『サイエンス』、165)
- (2) 人の頭ほどもある真っ赤な茸形の花が、時々落下してきていた。(『イトロベ』、179)
- (3) 戸田は一瞥しただけで、あっさりそう言った。あまりのあっけなさに、浅見がものたりなくなるほどだ。(『鐘』、83)

例(1)では、「月が地球に」接近する程度を評価するための目安として、「ぶつかりそう」という表現の表す事態が「ほど」によって導入されている。例(2)では、問題の「花」の大きさを評価するために、「人の頭」が私たちに予測できる一定範囲のある大きさを持つという事態³が「ほど」によって導入されている。例(3)では、「あっけなさ」つまり事態実現の容易さを評価するために、「ものたりなくなる」という表現の表す事態が導入されている。つまりここで「ほど」による修飾句が表すのは、被修飾句(文)の表す事態に関わる何らかの程度を評価するための目安、おおよその比較基準となるような事態である。

さらに、上の例では「ほど」句(修飾句)の事態の程度はすべて、被修飾句の事態成立の認定基準を超えて高い方に偏っている。月と地球の接近が「ぶつかる」事態に近いのも、花の大きさが「人の頭」のそれに近いのも、「あっけなさ」つまり事態実現の容易さが「ものたりない」と言える事態に近いのも、それぞれ「接近している」「(花が)大きい」「あっけない」と認定できる基準を越えており、また「特定のあるいは特殊な状態にきわめて接近していること」(川端 2002: 47)を強調しているとも言える。したがって、川端の言い方をすれば「ほど」句の事態Pの程度は、被修飾句の事態Qが近づこうとする「完成

点または到達点」(同、42頁)であるということもできる。

川端(2002)によればこれは「ほど」の特徴であって、「くらい」の特徴ではない。ところがこれらの例では、「ほど」を「くらい」に置き換えても、伝達意図に関わるような意味の違いは生じない。⁴

- (1)月が地球にぶつかりそうなくらい接近してることになるんです。
 (2)人の頭くらいもある真まっ赤な茸形の花が、時々落下してきていた。
 (3)戸田は一瞥しただけで、あっさりそう言った。あまりのあっけなさに、浅見がものたりなくなるくらいだ。

したがって、「Pほど」のPがQの認定基準以上でありQの「完成点または到達点」を示す、また強調するに値する「目立ち性」を持つ、というだけでは「ほど」を「くらい」から十分に区別できない。

また例(2)の「人の頭ほど」は花の大きさを具体的に示しており、PとQとが「一対一」で対応しているとも言える。これは川端が「くらい」の特徴としている点である。したがって、「Pぐらい」が「一対一」の例示であるとする川端の説明は外れてはいないが、「ほど」にも該当する以上、「ほど」と「くらい」を区別するには十分ではない。

次に否定形式との共起の制約についての川端の記述を検討してみよう。まず川端は、「ほど」が「否定の形式と自由に共起できる」のに対して、「くらい」は「否定の形式と必ずしも共起しない」(41頁)と記述している。⁵「くらい」が持つとされるこの制約について、形式的に似通った一連の例文を用いて検討してみよう。

- (4)日本ぐらい住みやすい国はない。

ここで存在が否定されているのは、「国」ではなく、あくまで「日本ぐらい住みやすい国」である。話し手はまず、「日本」を目安として評価できる程度に、つまり「日本」と同程度に住みやすい国を想定する。その上で、そうした仮想上の国が現実には存在しないと判断する。つまりここでは異なる二つのレベルの判断が関与しているのであり、「くらい」が参与するのは最初のレベルの判断である。したがって(4)の「くらい」は、次の例と同様に、「否定の形式」にではなく「肯定の形式」に生じていることになる。

- (5)(その国は)日本ぐらい住みやすい。

(4)と(5)のいずれにおいても、「くらい」が導入するのは事態の程度を評価するための目安である。今度は別のケースを考えてみよう。

- (6)(その国は)日本ぐらい住みやしくない。

このような表現を自然に発しうるのは、「その国」が日本と同じ程度に住みやしくないことを伝える場合である。つまりこの「くらい」も、「住みやしくない」

程度の目安を示す用法であり、その意味では(5)と同じであって、問題となるのが「住みやすさ」の程度か「住みにくさ」の程度かという違いがあるにすぎない。一方、問題の「国」が住みやすさの程度において「日本」に及ばないことを伝えようとする場合には(6)の表現は不適切となり、「くらい」を「ほど」に変えなければならない。

かくして「くらい」が生起できるかどうかは、否定という形式の問題にではなく、話し手が表現全体によって何を伝えようとしているかという伝達意図の問題に関わっている。では上のような伝達意図を持つ表現の中でなぜ「くらい」が生起できないのか。それが本稿の解決すべき問題である。

「くらい」は、とりわけ話し言葉において広く用いられる形式である。その使用範囲は「ほど」の範囲を覆うように広がっていると思われる。実際、「ほど」や「くらい」に導入される事態が、問題の事態の程度を測る目安として用いられる場合は、その程度がきわめて高く、事態が近づこうとする到達点と考えられるような場合でも、また程度の尺度上の値を具体的に示していても、「ほど」と「くらい」のどちらも使える。もしも「くらい」の持つ固有の意味的特徴の影響がないとすれば、「目は口ほどにものを言う」のような慣用的に固定した表現は別にして、話し言葉では「くらい」がすべての用法の「ほど」に取って代わることも考えられる。しかし実際にはそうっていない。このことは、単に「くらい」が「ほど」の持つ意味的特徴を持たないということでは説明できず、「くらい」の持つ意味的特徴、つまり事態に対するある特定の捉え方と、話し手が表現に託そうとする伝達意図とが、場合によっては強く反発しあうからではないだろうか。

そこで以下では、まず「くらい」の意味的特徴を抽出し、次いで上で述べた問題がその意味的特徴から説明できることを示したい。

2. 「くらい」の意味的特徴

2. 1. 導入される事態の程度が低い場合

程度の目安を示す場合には「ほど」と「くらい」のどちらも使えることはすでに見た。そこで、ここでは「くらい」が用いられる典型的なケースであってしかも「ほど」には置き換えられないケースを取り上げ、「くらい」の意味的特徴を考えてみたい。次は、「これぐらいの～は」、「～くらいでは」、「～くらいには」、「～ぐらいなものだ」という結合形式の例である。

(7) これぐらいの工具は揃えよう。

(<http://www.asist-world.net/manual/kougu.htm>)

- (8)ラテンアメリカでは日本人のサッカー下手は常識だ。ブラジルで以前、カズこと三浦知良が活躍したくらいでは、それは覆らない。(『C. H. E.』、11)
- (9)あ、いえ、これはなんの役にも立ちませんね。どうでしょう、ペーパーウエイトくらいには使えそうですけど、使ったことはありません。(『黒猫一』、15)
- (10)ウロン村では、ただでさえのんびりしているのに加えて、時間の概念が恐ろしいほど希薄だ。というより無きに等しい。彼らが頓着する時間とは、夜か、夜でないかぐらいなものだ。(『イツロベ』、162)

ここで「くらい」が導入する事態には一つの共通した特徴がある。それは話し手が問題とする程度に関して、ごく低いものの例として話し手によって評価されていることである。例(7)の「これぐらいの工具」は工具をそろえると言える事態としては最低限のものとして話し手によって評価され、例(8)の「三浦知良が活躍したくらい」は、問題になっている事態、つまり日本人のサッカーに対するブラジル人の評価を覆らせることを目的とする事態の程度としては、低すぎて役に立たないものとして評価されている。例(9)の「ペーパーウエイトくらいに」使えることは、何かの役に立つと言える事態としては程度の低いもの、つまり無価値と言っていいものとして評価され、例(10)の「夜か夜でないかぐらいなもの」は、人々が「時間の概念」を持つという事態の程度としては低いもの、「無きに等しい」程度として評価されている。このような場合、「くらい」を「ほど」に変えると伝達意図が不明になってしまう。

(7)? これほどの工具は揃えよう。

(8)? カズこと三浦知良が活躍したほどでは、それは覆らない。

(9)? ペーパーウエイトほどには使えそうですけど、使ったことはありません。

(10)? 彼らが頓着する時間とは、夜か、夜でないかほどなものだ。

たとえば例(7)では、「これぐらいの工具」が程度の低いものという話し手の評価を含むことによってこの表現全体が首尾一貫した伝達内容を持つのであるが、(7)では「これほどの工具」が程度の高いものという評価を含んでしまうため伝達内容の一貫性が破綻してしまう。

程度の低さを強調するということは、導入された事態に対する話し手の評価を示すことである。この評価は「ほど」の場合のそれとは正反対の方向性を持つ。したがってここで「くらい」を「ほど」に換えられないのは、「ほど」の持つ意味的特徴のためであるばかりでなく、「くらい」の持つこの意味的特徴のため

めでもあると考えなければならない。

さらに、「くらい」が、「たかだか」、「せいぜい」や「せめて」と共起する場合は、限定された範囲では最大限の程度となる事態を、話し手が何らかの基準に照らして程度の低いものとして評価しつつ示す表現である。

(11) 選挙に一生懸命になれといわれても、私の場合、することはたかだか投票所に行くことくらいである。(『異見あり』、59)

(12) どの程度できあがった馬を調教するかにもよるけど、せいぜい人に慣れた馬を調馬索で回すくらいにしといたほうがいいよ。

(<http://www.hi-net.ne.jp/tjouba/toy.htm>)

(13) 整備に出せばそれまでの事ですが、せめて自分で「日常点検」くらいは出来るようになりたいと思いました。

(<http://www.occu.or.jp/news/box/99-6.htm>)

上の例(11)の「投票所に行くこと」は、話し手が選挙に関して行うこととしては最大限であるが、「選挙に一生懸命」であると言える事態としてはごく程度の低いものであるという話し手の評価を込めて導入されており、(12)の「人に慣れた馬を調馬索で引き回す」ことは、初心者である相手にできることとしては最大限であるが、馬の調教としては程度の低いものであるという話し手の評価を込めて導入されている。また(13)の「日常点検」は話し手にできる最大限であり、かつ自家用車の管理としては程度の低いものであるという話し手の評価を込めて示されている。このようなケースでは、伝達意図を不明にすることなしには「くらい」を「ほど」に置き換えられない。

(11)? 私の場合、することはたかだか投票所に行くことほどである。

(12)? せいぜい人に慣れた馬を調馬索で回すほどにしといたほうがいいよ。

(13)? せめて自分で「日常点検」ほどは出来るようになりたいと思いました。

また事態の程度の低さを強調することは、考慮に値しないものとして事態の価値をおとしめることにもつながっていく。価値のおとしめというこの特徴を特に明確に示すのは、「くらいなら」という慣用的に決まった結合形式における「くらい」である。⁹

(14) 妙に景気対策など、生ぬるいことをするくらいなら、思いきった原因療法をやったらどうか。(『異見あり』、56)

(15) 高松を訪れた観光客は、もちろん、まず第一番めに栗林公園にやって来る。ここを見ずに帰ってしまうくらいなら、なにも高松に来ることはない。(『鐘』、64)

上の例では、「くらい」に導入される事態は、問題の事態に関してきわめて程度の低いものであり、考慮に値しないものとして切り捨てられるためにのみ導入

されている。例(14)では、「生ぬるいことをする」は、景気対策としての有効性の程度がきわめて低いものとして切り捨てられ、例(15)では、「ここを見ずに帰ってしまうくらい」のことは、人がわざわざ何らかの行為を行う事態としてはその意義の程度がきわめて低く、行為をしないこと（「高松に来」ないこと）にも劣るものとして切り捨てられる。かくして「くらい」は、程度の低さを強調する、あるいは価値をおとしめるという、導入される事態に対する話し手の評価を表す。

「くらい」と「ほど」には確かに文法的な振る舞いの違いもある。たとえば「くらい」の作る名詞句は、次のように「を」、「が」という助詞なしで動詞の補語になることもあるが、「ほど」にはこのような用法はない。

(16)「犬です」(略) / 「それくらいわかりますわ」彼女は顎を引いてむっとした表情になる。(『黒猫一』、15)

(17)それくらい辞書で調べろよ

(<http://bbs.wince.ne.jp/ch10/mqbbbs.cgi?UMODE=BETA2>)

(16)? それほどわかりますわ

(17)? それほど辞書で調べろよ

しかしこの場合でも、「くらい」と「ほど」の違いが文法的な違いにとどまるわけではない。「ほど」が生起できるような形に変えて文法的問題を解決しても、「くらい」と「ほど」とを交替不可能にするような意味の違いが依然として残るからである。

(18)「犬です」 / 「それくらいのことわかりますわ」

(19)それくらいのこと辞書で調べろよ

(18)? 「犬です」 / 「それほどのことわかりますわ」

(19)? それほどのこと辞書で調べろよ

例(18)、(19)の不自然さは、「ほど」が「くらい」とは正反対の話し手の評価を含んでおり、それが伝達意図と衝突することに由来する。例(18)、(19)の話し手が伝達しようとしているのはそれぞれ、見ているものを「犬」であると理解することなどは理解の困難さの程度が低いもの、それゆえここでは言及する意味がないということであり、また、(18)や(19)の話し手が伝達しようとしているのは、「それ」の指すものが自分で辞書で調べられるような簡単なこと、それゆえ人を煩らわせるに値しないものであるということである。しかしこれを「ほど」に変えてみると、同じ事態が程度の高いものという評価を与えられてしまい、伝達意図が不明となる。

以上「くらい」の意味特徴を確認した。要するに「くらい」は「ほど」とは逆方向の話し手の評価を含む形式である。

2. 2. 導入される事態の程度が高い場合

今見てきた「くらい」の特徴は、「くらい」の生起の制約を説明するものである。先に整理したところによれば「くらい」が生起できない否定形式のケースとは、「ほど」のような形式によって導入される事態に問題の事態が及ばないことを伝える表現であった。いくつかの例で確認してみよう。

(20)彼は全国大会で入賞するほど強くない。(川端の例)

(21)「用事というほどのことでもないんです」(『黒猫一』、195)

(22)糸魚川の上司の話も伝えられ、なにも死ぬほどのことはなかったのに——と首をかしげているという。(『鐘』、115)

(23)「それはさすがですねえ」／「いや、そんなに期待されるほどのものはありませんよ」(『鐘』、117)

この場合、表現全体が表すのは、問題とする事態の内包する何らかの程度が「ほど」の導く修飾句の事態の内包する程度に及ばないということである。例(20)では「彼」の強さの程度が「全国大会で入賞する」事態の内包する程度に及ばないということであり、(21)では問題となる事態の緊急性あるいは重要性が「用事」と言える事態の重要性に、(22)では問題の事態の深刻さが「死ぬ」事態の深刻さに、また(23)では問題とする事態の価値の程度が「期待される」事態の内包する程度に、それぞれ及ばないということである。

この場合、「ほど」を「くらい」に置き換えると伝達意図が不明になる。

(20)?彼は全国大会で入賞するくらい強くない。

(21)?「用事というくらいのことでもないんです」

(22)?なにも死ぬくらいのことはなかったのに——

(23)?そんなに期待されるくらいのことはありませんよ。

これはなぜだろうか。「くらい」が「一対一」の例示であるということだけでは、このような否定の述語と共起できない理由にはならない。少なくとも例(20)や(22)では、導入される事態が「一対一」の例示、つまり具体的な程度の目安を示しているが、にも拘わらず「ほど」しか使えないからである。

上で見てきた「くらい」の持つ固有の意味的特徴は、それが導入する事態に対する話し手の否定的評価を含むことである。導入する事態の程度を低く評価し、切り捨てようとする話し手の否定的評価は、上のような表現に結びついた伝達意図と根本的に衝突する。その伝達意図とは、問題とする事態が「くらい」によって導入される事態の程度に及ばないことを伝えようとするものであり、そこには、導入される事態ではなくむしろ問題の事態の方を低く評価し、切り捨てようとする心的態度が含まれる。一方「くらい」は典型的にはそれが導入する事態を低く評価し切り捨てる話し手の評価と結びついている。導入する事

態の切り捨てと問題とする事態の切り捨て、これは無視しがたい矛盾と言えよう。かくして、上のような場合に「くらい」の生起が妨げられるのは、「くらい」が典型的に持つ意味の特徴がそれを妨げるためだと考えることができる。

以上に見てきたケースと異なり、問題とする事態の程度を評価するための目安となる事態を「くらい」が導入する場合には、その事態の程度がきわめて高い場合にも、「くらい」の生起が可能である。この場合には「くらい」と「ほど」両形式の意味の違いが明らかではない。

⑭月が地球にぶつかりそうなほど(くらい)接近してることになるんです。

(=①)

⑮人の頭ほど(くらい)もある真っ赤な茸形きのこの花が、時々落下してきていた。(=②)

しかし同じく程度の高い事態を導入しても、次のような場合には両形式の違いがでてくる。

⑯相場がすでに下がっているのに、前の高値を覚えていて、あれぐらいになれば売ろうと、思いながら失敗することが多い。

(<http://www.ops.dti.ne.jp/~glass/yougo.html>)

上の例⑯で「あれ」が指すのは「前の高値」の具体的な値である。このような場合「くらい」と違って「ほど」は生起しにくい。

⑰)? (前の高値を指して) あれほどになれば売ろうと、思いながら失敗することが多い。

ここから次のことが考えられる。高い程度を強調する「ほど」は、たとえその値が高い値であっても、スケール上のある値を限定する目的には向かず、むしろ言及された事態の程度を越えてさらにその先へと伸びるスケールの先の方までを含む傾向がある。一方、導入する事態の程度の低さを強調し、そこからその事態を問題とするに値しないとして切り捨てる「くらい」の特徴は、どこまでも伸びる程度のスケールの先までを視野に入れることとはなじまない。価値をおとしめることはいったん導入しながらもそれきり切り捨てることにつながるからである。むしろ「くらい」は、程度の高低に拘わらず、一つの値を限定する目的にふさわしいということが出来る。これは、程度を目安を示す用法で、程度を限定する「ちょうど」が「くらい」とは共起しても「ほど」とは共起しない事実と合致する。

⑱「これ、流れてるんですか?」 / 「そう。一晩で城下町一帯のお堀の水がちょうど入れ替わるくらいにね」(『月の一』、45)

(⑱) a ? 一晩で城下町一帯のお堀の水がちょうど入れ替わるほどにね

b 一晩で城下町一帯のお堀の水が入れ替わってしまうほどにね

この場合「ほど」よりも「くらい」の方が自然である。それは、「ほど」が言及された事態の程度より上の程度までも含意するのに対して、「くらい」はそれより上の程度を含意しないからであると考えられる。参考のために挙げた(7b)は自然である。流れの速さ(という程度の高さ)を強調することになるからである。話し手によっては例(7a)が容認されるかもしれないが、その場合は程度の高さの強調となり、(7)の伝達意図、つまり明確な程度の目安を示す意図とは異なると考えられる。

言及された事態の程度より上の程度までは含意しないという「くらい」の意味的特徴は、「くらい」と「ほど」の対立を示すもう一つの言語事実を説明するものである。それは、「ほど」の用法の一つ、程度の相関関係を示す用法が「くらい」にはないという事実である。程度の相関関係を示す用法とは、二つの事態にそれぞれ関わる二つの程度が平行して変化することを示す用法で、次はその例である。

(28) どうも集合住宅というのは、住宅としてのクオリティーがあがればあがるほど、入居者相互の交流の度合いが下がる傾向があるみたいなんですよ。(『理由』、123)

(29) 初めてのことから、はじめのうちは発表する学生がいない。だから私は最初のほうに報告した学生ほど、良い点数をつけたのである。(『異見あり』、40)

(30) 試験の前ほど推理小説が面白くてやめられない、といった状況に似ているのかもしれない。(『六番目一』、211)

このような「ほど」は伝達意図を不明にすることなく「くらい」に置き換えることができない。

(28)? 住宅としてのクオリティーがあがればあがるくらい、入居者相互の交流の度合いが下がる

(29)? 最初のほうに報告した学生くらい、良い点数をつけた

(30)? 試験の前くらい推理小説が面白くてやめられない、といった状況

ある事態の内包する何らかの程度と別の事態が内包する別の何らかの程度の間程度に相関関係があるとすれば、一方の事態がそれに関わる程度のスケール上を上方へと移行するに伴って、もう一方の事態もそれに関わる程度のスケール上を同じように上方へと移行しなければならない。このことはスケールの直線が伸びる先の方まで言語形式の意味の範囲に入っていなければならないということである。したがって、「ほど」ときわめて近い類義表現でありながらこの用法を「くらい」が持たないという事実は、含意される程度の値または範囲を、言及された事態のそれに限定する傾向を持つという「くらい」の意味的特徴に

よって説明できる。

2. 3. 程度が疑問の対象となる場合

このような両形式の意味的特徴は、程度を疑問の対象とする「どれくらい」と「どれほど」との違いに現れる。「どれくらい」の場合には、「くらい」の持つ意味的特徴はキャンセルされる。それは程度の低さを強調したり価値をおとしめたりするような話し手の評価を示すという特徴である。

- (31)ここで、ユーザーがどれくらいのことができるかを設定することができます。

(http://www.appleroom.com/mac/os_9_hypercard.html)

- (32)初級だとどれくらいのことを教えればいいのかわからないのですが、もし私ができるのであれば、ぜひともやりたいです。

(http://musicjob.net/contents_f0c8a7ad-fff7-4e6d-ae90-083871f32be5_2.html)

- (33)うなぎについてみなさんはどれくらいのことをご存知でしょうか

(<http://www7.ocn.ne.jp/fujiya/unaginohanasi.html>)

上に上げた例で、程度は純粋な疑問の対象となっている。つまり話し手は、程度に対するどのような感情的評価も加えることなく、事態の内包する程度の値を純粋な疑問の対象としている。ところが、この「どれくらい」を「どれほど」に変えると、形としては自然でもやはり意味の違いが生じる。

- (31)ここで、ユーザーがどれほどのことができるかを設定することができます。

- (32)初級だとどれほどのことを教えればいいのかわからないのですが、(...)

- (33)うなぎについてみなさんはどれほどのことをご存知でしょうか？

このような例では、話し手はそれぞれ、「ユーザー」には多くの事ができるという暗黙の前提、「初級」の授業でも多くの事を教えるべきだという暗黙の前提、「うなぎ」について人々が多くのことを知っているという暗黙の前提に立って、それぞれの表現を発していることになる。つまり「どれほど」は程度を疑問の対象とするだけにとどまらず、程度の高さに関する感情的評価までも伝えてしまう。したがって純粋に程度の値を疑問の対象とする場合には、例(31)～(33)の方が例(31)～(33)よりもふさわしいわけである。

今度は逆に「どれほど」の実例に基づいてこの点を検討してみよう。

- (34)地球温暖化の原因や影響を説明した後に、クリーンエネルギー自動車が、どれほど優秀かがわかる内容です。

(<http://www.eduplan-net.com/diary/tokudane/200012.html>)

- (35) とくに障害のある人々との連帯のために活動する施設などというようなプログラムは、すべての人に希望への新しい根拠といのちへの具体的な手がかりを与えるために、愛がどれほどのことをなしうるかを雄弁に語るのです。

(<http://www.japan-lifeissues.net/section.php?topic=aid>)

- (36) 二人の医師が逮捕され、事件の輪郭がだんだん明らかになってきた。嫌がる看護師長らに改ざんを指示、自らも手を染めていた責任者の医師。それが、どれほどのことかも分かっていないような、彼らの口ぶり。

(<http://www.toonippo.co.jp/tenchijin/ten2002/ten20020704.html>)

これは問題の事態に対する話し手の高い評価を表している例である。文脈から明らかのように、話し手はそれぞれ、「クリーンエネルギー自動車」がきわめて「優秀である」、「愛」がきわめて多くのことをなし遂げうる、また問題の医師達の行為が犯罪として極めて深刻であるという評価、つまり程度の高さを強調するような心的態度をもってこれらの表現を発している。

この「どれほど」を「どれくらい」に変えても、表現としては不自然ではない。

- (34) クリーンエネルギー自動車が、どれくらい優秀かがわかる内容です。

- (35) 愛がどれぐらいたくのことをなしうるかを雄弁に語るのです。

- (36) それが、どれぐらいたくのことかも分かっていないような、彼らの口ぶり。

ただしこの置き換えは、「どれほど」が生起する例(34)~(36)に比べて、「どれくらい」が生起する例(34)~(36)では、程度の高さへの話し手の評価が弱められるという結果をもたらす。そこで上のような文脈では、実例がそうであるように、「くらい」より「ほど」の方が生起するのにふさわしいわけである。この事実もまた、「くらい」の意味的特徴、話し手による事態への低い評価を示すという意味的特徴は、高い評価を示すという「ほど」のそれに比べて、より容易にキャンセルされるということを示している。

3. 結論

以上に見たように、「くらい」という形式は、典型的には程度の低さを強調するという話し手の感情的評価を示す。これは「ほど」とは逆の方向性を持つ評価である。程度の低さを強調することは、導入した事態の価値をおとしめ、その事態を導入した上で切り捨てることにもつながる。

「くらい」の持つこうした意味的特徴は、これまで説明されていなかった

「くらい」に関するいくつかの問題を説明するものである。一つは、問題となる事態が導入される事態の程度に及ばないことを示すための表現で「くらい」が生起できないという事実、そしてもう一つは、程度の相関関係を表す表現で「くらい」が用いられないという事実である。

前者は、導入される事態ではなく問題となる事態の方を低く評価し切り捨てようとする伝達意図と「くらい」の意味の特徴が明らかに矛盾するケースである。

導入される事態を程度の低いものとしておとしめ切り捨てるような話し手の評価と結びつくために、「くらい」の示す程度の範囲は直接言及される事態の程度に狭く限定される。つまり言及された事態の程度を越える範囲までは「くらい」の意味には含まれない。程度のスケールの先の方までを視野に入れなければならないケースである程度の相関関係を示す用法が「くらい」にないのはそのためである。

この直接言及される事態の程度だけを特定の示す「くらい」の特徴から、事態を明確に特定しない「どれくらい」のような疑問形式では、話し手の評価に関わる意味もキャンセルされ、程度は純粋な疑問の対象となりやすい。この点は、「どれほど」が程度の高さを暗黙の前提とした表現として用いられやすいことと対照的である。

要するに「くらい」は、問題の事態の程度を評価するための目安としてある事態を特定の示す形式であり、典型的にはそれが導入する事態の程度に対する話し手の否定的評価を含むものと言える。

このほか「くらい」には、「三日くらい前／三日ほど前」のような数値を曖昧にする用法もあり、また文法的に異なる振る舞いの問題もある。そうしたことも含めた「くらい」の包括的な記述は今後の課題としたい。

注

- 1 奥津（1980）は、「ホド」や「クライ」を文法的振る舞いの違いによって「形式副詞」と「形式名詞」とに分けているが、本稿では名詞のような自立性を持たず他の語と結合してはじめて用いられるような場合の「くらい」や「ほど」を一つの形式とみなし、「程度に関わる非自立形式」と呼ぶことにする。
- 2 どのような形式に接続するかによって「くらい」と「ぐらい」の自然さの度合いが異なることもあるが、話者によっても揺れがあり、二つを別物と

して明確に区別することは困難である。本稿の目的は両者に共通する意味的特徴の抽出であるため、この違いは問題としない。

- 3 「ほど」に前接するのがたとえ単なる名詞であっても、意味的には事態を表すという点は奥津（1980：160）が指摘している。
- 4 「ほど」に比べて「くらい」はより話し言葉的であるといった文体差はこの場合問題としない。
- 5 川端は別のところでは、「「P くらいQ ない」は、「P ほどQ ない」への置き換えが可能ならば「P = Q」、そうでなければ「P = Q ない」となる具体的な程度の例としてPを提示するものであり、その合致度の高さからQの程度を強調するものである」（46頁、下線は引用者）とも述べている。この記述は、「くらい」が生起できて「ほど」が生起できない否定の形式を想定する点で、本稿の本文に引用した記述と矛盾する。実際、ここに引用した記述にも拘わらず、川端が挙げているのは、「くらい」から「ほど」への置き換えができない例ではなく、その逆に「ほど」から「くらい」への置き換えができない例である。下にそれを示す。
 - a お前 [ほど／くらい] 歩みののろいものはない。
 - b 彼は全国大会で優勝する [ほど／*くらい] 強くない。（45頁）
 結局、上の例（b）は、「くらい」が「否定の形式と必ずしも共起しない」という本文中に引用した記述の例とみなすことができる。
- 6 「ほどなら」という結合形式が、「くらいなら」の意味で用いられる場合もないわけではない。インターネットによる検索でも、わずかながらそうした例が見つかった。

無論、実際は先生の名前を知っていたとしても、意地でも答えることはしなかったろう。言ったって卒業させてくれるわけでない。人にその話をする場合は、答えるほどなら死んでやると言っただろう。

(<http://www.tokyo-kurenaidan.com/dazai-mitaka.htm>)

この場合、話し手にとっての「答える」行為の重大性が「ほど」を生起させる心理的動機になっていると考えられる。しかしながら「ほどなら」は、インターネットによる検索（Google使用）の結果でも、次のように高い程度の強調とともに用いられることが圧倒的に多い。

名人が足を運ぶほどなら全国大会なんでしょうね。

(<http://www.interq.or.jp/dragon/onigiri/animation/korikame.htm>)

痛みがひどく会社や学校を休むほどなら、その症状は病気かも。

(<http://www.otsuka-biyo.co.jp/topics/topics10/seiri-2.html>)

参考文献

- 井本亮 1999 「「ほど」構文の解釈と主文の有界性について」『筑波日本語研究』第4号 筑波大学 文芸・言語研究科 日本語学研究室
- 奥津敬一郎 1980 「「ホド」——程度の形式副詞」
- 川端元子 2002 「程度副詞相当句（節）「Pほど」について」『日本語教育』第114号
- 国広哲弥 1982 『意味論の方法』大修館書店
- 丹羽哲也 1992 「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』44号 大阪市大文学部

引用例出典（引用順）

立花隆『サイエンス・ミレニアム』、中公文庫／藤木稟『イツロベ』、講談社文庫／内田康夫『鐘』、講談社文庫／井上尚登『C. H. E.』、角川文庫／森博嗣『黒猫の三角』、講談社文庫／養老孟司『異見あり一脳から見た世紀末一』、文春文庫／恩田陸『月の裏側』、幻灯舎文庫／宮部みゆき『理由』、朝日文庫／恩田陸『六番目の小夜子』、新潮文庫

* インターネットによる例は引用箇所を所在を示した。